

野生生物と社会学会青年部会企画

『他分野のアプローチに触れる若手研究座談会－野生動物管理の学際的議論にむけて－』
報告書

野生動物管理における質的研究の貢献

総合研究大学院大学 先導科学研究科

高畑 優

はじめに

野生動物の保全・管理において、学際的なアプローチが重要であることは今や言うまでもない。「野生生物と社会」学会の理念は、野生生物と人との多様な関係性を対象とする幅広い学問分野のプラットフォームとなることであり、“幅広い学問分野”には、自然科学から人文・社会科学、これらを横断する学術研究が含まれている。しかし、実際は学際的な研究や議論をすることは困難を極める。学際的な取り組みを実現する上では何が足りていないのだろうか？

本企画は、足りていない項目として第一に考えられる「他分野の学問理解」に着目し、自然科学から人文・社会科学にわたる学問・研究紹介を通して、分野間の垣根を下げることを目的に実施された。そこで筆者は、自身の研究内容である「人々が野生動物に餌付けする動機」について触れながら、質的研究について紹介した。筆者の専門は生態学であるが、研究内容の性質ゆえに人間・社会的側面に目を向けざるをえない。そこで、自然科学の研究者が人文・社会科学研究の理解や取り組みのハードルを少しでも下げるため、なるべく自身の経験に沿った発表をした。本稿では、筆者の未熟な知識と考えが露呈している部分があるとは思うが、一意見として受け取っていただければ幸いである。

質的研究と量的研究

まず、質的研究とは何かという点である。研究の手法は、量的研究と質的研究に大きく分類することができる。量的研究とは、ある事象の量的理解を目指すものであり、ほぼ全ての自然科学及び、社会科学の中でも用いられてきた。仮説検証を行うために数量化できるデータをランダムサンプリングし、妥当な統計解析を用いてアプローチする。この、「現象は量的に測定可能」という知識の捉え方は、科学哲学の中では実証主義的立場であると言われており、再現性や客観性を重視する。

一方、質的研究はある事象の質的理解を目指すものであり、文化人類学や医学・看護の領域で広く用いられてきた。数値では表すことのできない社会的・文化的な事象に着目し、現象について探索的かつ深く理解していくことで新たな理論を生成する手法である。質的研究が持つ「現象は人々によって社会的に構築された多元的なものである」とする知識の捉え方は、社会構築主義的立場にある。ゆえに、再現性や一般化は念頭においておら

ず、するとしても翻訳可能性を重視している。客観性については、分析や結果の解釈が主観的にならないよう、自身の分析立場や心象を常に省みるという自己反省性も重視される。

つまり、量的研究と質的研究は科学哲学が大きく異なり、知識や現象の捉え方や、それに付随して取るべきアプローチの方法が異なっているのである。また、端的に説明すると、量的研究は数値データを収集しグラフ化するものであり、質的研究は人々の語りのデータ（写真や文献なども）を収集し、文章によって説明するものである。

人々の野生動物への餌付け動機と質的研究

筆者の研究テーマである野生動物への餌付け問題と、なぜ質的研究が必要であったかについて触れよう。近年、野生動物への餌付けは、生態系や野生動物に対して悪影響をもたらすことがわかっている。例えば、餌付け場所にはたくさんの動物個体が集合するため、動物集団内での病原菌の蔓延リスクが高まる。また、特定の動物種の個体数が増えることで、それらを捕食する野生動物種の増加や、競合種が減少するなど、生態系における種組成をも変化させる。さらには、動物の過度な人馴れを引き起こすため、咬傷被害や人獣共通感染症の蔓延リスクなど、人間生活にも悪影響をもたらす。ゆえに、餌付けは法令（自然公園法では国立公園内での餌付けが禁止）や各地方自治体の条例によって規制され始めている。

しかし、餌付けは依然管理できていない現状にある。たとえば、「神戸市いのししからの危害の防止に関する条例」を施行した神戸市においては、罰金を伴う条例が施行されたにもかかわらず、継続して餌付けをする市民が存在することが報告されている（布施 2011）。布施（2011）によると、市民は餌付けに関する条例を理解しつつも、イノシシに対する好意的・同情的感情により継続して餌付けしていると指摘されている。さらに、ニホンザルの事例においても、人々はサルに関する社会問題や餌付けに関する条例や知識を見聞きしているにもかかわらず、実際にサルと遭遇した場合には餌付けをしていることが報告されている（田中 1995）。餌付けを管理するためには、法令や条例を施行するだけではなく、人々の餌付けの動機や感情を理解した上での政策設計が必要であることが窺える。

人々が餌付けをする動機については、これまで数多くの専門家が推測してきた。たとえば、堂前（2006）では、動物の関心を引くことで精神的な一体感を得たい、自分に近づけることで距離を短縮したい、自分が餌をあげなければという思い、相手をコントロールして優位に立ちたい、などの内容が想定されている。また、石田ら（2013）によっても似たような動機の推測が記述されている。しかしながら、餌付けの動機について、餌付けする市民を対象に実際に調査した事例はごくわずかである。田中（1995）は、市民が野生動物に餌付けする動機について量的調査をしているが、著者が推測した餌付けの動機をもとに作成されたアンケートを用いており、市民が餌付けする多様な動機について汲み取れているとは言い難い。これらの先行研究を顧みると、市民の餌付け動機に関する理解は進んで

いるとは言えず、まずは探索的に理解をしていく質的研究が重要となってくるのである。

質的研究の手法

餌付け動機についてどのように明らかにするかという点であるが、実に多様である質的研究の手法から妥当なものを選ばねばならない。もっとも一般的である手法は口頭データであるが、他にも観察とその記録や写真等を用いる視覚データ（参与観察やエスノグラフィー等）もある。口頭データの中には、サンプリングの対象とする人々の数が異なることで、複数人数を対象とするグループ・インタビューやフォーカス・グループ、一人を対象とするインタビューなどに分けられる。一度にインタビューする人数が増えることで、意見が出やすくなったり、対象者が意見の相互監視をすることで誤った意見が出にくくなったりする。しかし、実施者には場をマネジメントする能力が必要であることや、意見が逆に出にくくなることもあるため、状況に応じて適切なものを選ぶべきである。

さらに、インタビューの中にも、質問内容をかっちりと決めた構造化インタビューから、質問項目はありながらもアドリブで質問を追加したり掘り下げたりする半構造化インタビュー、質問の大枠しか決めずにほとんど会話のような形で行う非構造化インタビューなどがある。質問の自由度が高くなるほど実施の難易度が高くなるが、より豊かな口頭データが収集できる。実施の難易度とデータの質がトレードオフの関係にあると言える。

また、質問項目を作成する際には、さまざまなバイアスに留意せねばならない。例えば、「餌付けってダメだと思いますけど、どう思いますか？」のように価値観を質問に組み込むことで被験者が同意・否定しやすくなるなど実施者の質問方法によってバイアスが生じる場合や、質問項目が多すぎて疲れて適当な回答をする、世間的に好ましいと思われる嘘の回答をするなど、被験者によってバイアスが生じる場合がある¹。

「とりあえず市民にアンケートをすればいい」、「とりあえず聞き取りしてみたらいいのでは」との声を聞くことがある。しかし、調査をする上では、上記したような妥当な手法の検討や理論的立場の理解、バイアスや被験者への配慮など、多様な点に気を使わねばならない。気軽に社会調査ができるだろうと捉えるのは間違いなのである²。

質的研究によってわかったこと（一部抜粋）

筆者は人々の餌付け動機について知るべく、個人の餌付けに対する意見を得やすいかつ、必要に応じて質問を掘り下げることにより豊かな分析ができる半構造化インタビューを実施した。また、餌付けする人々だけでなく、専門家にも市民が餌付けする動機について想定を聞かせてもらうことで、これまでの想定と実際の意見がどのようにずれていたのか調査した。

その結果、まず、市民の餌付け動機は多様であることがわかった。野生動物を可愛いと思ひ、親しくなりたい気持ちや、守ってあげたいなど、専門家の想定と合致する動機が見られた。しかし、専門家が想定した他の動機である、餌付けや野生動物に関する知識が欠

如している、野生動物を所有物としてみなしている、自分の寂しさを紛らわすために餌付けしているという内容は市民意見からは得られなかった。つまり、専門家が市民と対話をする際に、誤った餌付け動機を想定して関わると、市民との対話をより困難にする可能性が窺えた。

また、市民が餌付けの是非を判断する上での情報の欠如や事実関係を誤認識している場合もあり、適切な情報を提供するだけで餌付けを管理できる可能性も示唆された。さらには、餌付け管理をする上で必要だと捉える科学的根拠が、専門家と市民との間で異なることも分かった。専門家は餌付けに関する一般則があれば根拠として使用できると考えていたが、一方で市民は、この地域の動物種での根拠がないと納得できないと考えていた。地域で餌付け問題の議論をする上で、どのような科学的根拠を収集すべきか提言できると言える。

おわりに

本企画では、野生動物の保全管理における質的研究の有用性について、市民が野生動物に餌付けする動機に触れながら紹介した。質的研究は有用ではあるものの、野生動物の保全管理で活用する上では課題があることは否めない。最後に、質的研究の課題について紹介する。質的研究の特徴ではあるが、“量的にデータを示さない”点は課題である。なぜなら、保全管理に取り組む研究者のほとんどは、量的研究である自然科学の科学哲学を持っているからである。筆者が個人的に感じた経験も元に理由付けするが、量的研究者にとっては、ランダムサンプリングでない点や、客観性が完全に担保されない点、再現性のない点、数値化されない点は納得できないだろう。しかし、逆の立場である質的研究者から見たら、現象について数値化する必然性に納得できないのと同じなのである。

科学哲学が異なるとは言え、将来的に学際研究をする上ではこの垣根を取り払わねばならない。その一つの手法として、混合研究法が活用できる可能性がある。混合研究法とは質的研究と量的研究を組み合わせた手法である。例えば、質的研究を実施した後に、その結果を踏まえてアンケート項目を作成して量的研究することである。また、筆者が精通する分野ではないが、質的データを量的に解析する手法もある。このように、質的研究者が量的研究者に寄り添いながらデータを解釈することは今後必要なのかもしれない。

-
1. バイアスについては Editage のページでわかりやすく解説されていたので、気になる方は見てください。
 2. アンケートをする際に、例え妥当な解析手法を用いたとしても、質問項目や配布する場所に配慮がなければ、所詮質の低いデータにしかならない。このように、質の低いデータを解析しても、結局は無価値な結果にしかならないことは *garbage in, garbage out*(GIGO)という警句として使用されている。

参考文献

- 石田戢・濱野佐代子・花園誠・瀬戸口明久. 2013. 「日本の動物観 人と動物の関係史」東京大学出版会.
- 小島望・高橋満彦. 2016. 「野生動物の餌付け問題 善意が引き起こす？生態系攪乱・鳥獣害・感染症・生活被害」. 地人書館.
- 佐藤郁哉. 2015. 「社会調査の考え方 上・下」東京大学出版会
- 田中俊明・揚妻直樹・杉浦秀樹・鈴木滋 1995. 「野生ニホンザルを取り巻く社会問題と餌付けに関する意識調査」霊長類研究 11: 123-132.
- 堂前雅史. 2006. 「動物の餌付けに関する総合的研究」第 29 回日産財団研究助成研究報告書.
<https://www.nissan-zaidan.or.jp/wp-content/uploads/102003.pdf> (アクセス：2022/8/25)
- 布施綾子. 2011. 「イノシシ餌付け禁止条例施行前後におけるイノシシ出没状況の変化と住民意識—神戸市東灘区を事例として—」システム農学 27(2): 55-62.
- Editage “質的研究で避けるべき 7 つのバイアス” <https://www.editage.jp/insights/7-biases-to-avoid-in-qualitative-research> (アクセス：2023/7/7)

総合研究大学院大学 先導科学研究科
五年一貫性博士課程 5 年
日本学術振興会特別研究員 (DC2)
高畑 優
Mail: yu.takahata1231@gmail.com